

英詩にあらはれたる戀

(ラフカデオ・ハーン「詩の鑑賞」よみ)

(Lafcadio Hearn : Appreciations of Poetry.)

くぼた、たをさ譯

譯者緒言

これはハーン氏の二八九六年より一九〇二年に亘る期間に東京文科大學に於て講述せられしものの抜粹を編纂したる「詩の鑑賞」卷頭の一章 English Poetry を譯したものである。同じく譯義抜粹の出版せられるものに "Interpretations of Literature" vol. 3 及び "Life and Literature" がある。

愛蘭の士官と希臘人の母との間に、スミルナの島に生れた彼は遂には遠く東のこの國に宿を見出したのであるが彼は十九世紀に於ける最大の散文家であつたと共に靈筆を揮つて新興島國の思想風俗を海の彼方に紹介した偉勳者である。「生か死か」の難問に遭遇せしめられ然も敢然として國家獨立のために泰西文化の輸入に努力した明治前半のあの必死の遺業を承け繼いで更に一步すすめて自家の文明とし科學とするには後進の青年達は實に生命がけで働かねばならなかつた。

ハーン氏はこの青年達の崇高な努力に熱涙を灑ぎ乍ら或は時に崇高な努力のためにかへつて青春の歡喜も知らずに死の國に急がねばならなかつた人々に慟哭しつつ、東洋ひんがしの國の詩美を彼獨特なイージースタイルの妙文に或は少年の時に教を受けた佛國の文學の流麗な口調に乗せて海の彼方に傳へたのであつた。

彼は嘗に東洋から西洋への紹介者であつたばかりでなく實に又再び得べからざる西から東への解説者であつた。講義にあらはれた彼は即ち西から東への解説者としての一面である。私等はこれを讀む時に、親切な叔父さんとも呼びたい彼が Good morning, Gentlemen といふ緩やかな口調で説き出す姿を空想する。作物の核心を攫んで他人の評に惑はされず獨特の批評なして時にはコレリツヂも及び難いごまで評された大批評家としてよりも私等は親しい叔父さんの姿を想ふ。

偏狹など言ふ人はあつても美しいローマンチズムを懷いて周圍を凝視した彼には日本人の美しい所ばかり見ゆ勝ちであつた。それだのに後年、宿と定めた日本さへも墳墓の地とするには少なからぬ不満があつたとは！

「ハーン氏を知つて居るか？」と聞かれて赤恥かいたやうな人達によつて政治と稱するものが行はれておればこそ無趣味が、野蠻が、權謀が、詐偽が、買収が國民を瘵瘵せしめる。自然主義とか稱するものが淺薄に船載せられ兇猛に横行したために裁判所の一件書類のやうなものが文學と僭稱せられ祇園、加茂川、木屋町に流連荒亡の限りを盡した遊冶郎の日記が遊蕩文學であるとかないとか妙な事で新聞屋を儲けさせる。ハーン氏が「文學解説」に於て述べた「批評家の言ふことを有難く拜聴してゐたら世の中におもしろい美しい文學といふものはなくなつてしまふ」といふ黒倒が解らねばこそ批評家と作家と妥協して讀者を手玉に取るといふ不埒も防ぎかねる。最後に私は尙一言附言するを許さるべく讀者の寛容を乞はねばならぬ。それは世界的文豪夏目漱石氏とハーン氏が共に我龍南に教鞭をとられたといふ誇である龍田の山も白川の流れもこの世界的文豪の詩囊になほ幾分の寄興をなしたに相違ない。私がこゝに譯して本誌に掲ぐる全く無用の業で

もあるまい。私は今碧眼の叔父さんが小磯の橋の上でその乗つた人力車の車夫の語り出つる西南戦争の追憶談に耳を傾けつゝ豊富な感情の熔鑪爐に清新な詩想を練つてゐる状を想ひつゝ緒言の筆を擱く。

日本の學生は英文學を研究すればするほど小説に於ても詩に於ても戀愛が特別に重視されてゐるのに驚ろくに違ひないと私は屢々思ふ。實際この頃では私自身でも少々驚ろくやうになつた。勿論私が日本に來る前には戀愛が文學の主要題材であるといふのは何の不思議にも思へなかつた。といふのは私が西洋より外は全く知らなかつたからであるが今になつてみると實際すこし奇妙にも思はれる。私にも奇妙なほどだつたら諸君にはさぞ妙に感ぜられるだらう。勿論この事實の單純な説明は結婚が歐洲及亞米利加では人生の最も重大な事で萬事はその如何によるものであるといふことである。東洋では全く譯が違ふ。がこの差違の單純な説明では充分でない。説明すべきなほ多くの事がある。なせ小説家ばかりでなくすべての詩人が戀愛を主なる題材とするのだらうか？私は知らぬ。といふのは私が教科書用に詩や散文の抜粹を企てるまでは——言ふまでもなく戀よりも以外の題材に關した文や詩を選ばうと努めながら——どんなにたくさん英文學が戀の題材で充たされてゐるか思ひ及ばなかつたからである。私が望んでゐるやうなものやうなものをたくさん發見するのはさておいて私はほとんど少しも發見することは出來なかつた。論文や歴史は外にして大散文家は殆んどすべて戀愛物語作家として有名である。そしてテニソンやロセツテイやブラウニングやシェレーやバイロンから接吻や抱擁や想像の又は現實の戀人への憧憬とかに就いて何にも含まぬものは數節の詩を抜粹するさへ殆んど不可能である。尤もウォーヅワースは例外であり又コレリツヂは全く戀に關したことは何にも含まぬ一つの詩

で最も有名であるにはあるが、然し例外は戀が（佛蘭西、伊太利、西班牙の詩についてと同様に）英詩の題目であるといふ一般則には影響は及ばさぬのである。

英國小説家に於ても同様である。この場合にも例へばロバート、ルイス、スチブンソン、この人の小説は女に關したことは全くなかつたやうな二三の例外は存する、それらは主に冒險小説である。が例外は極めて少ない。現在英國では殆んど毎歲千餘の新小説が出版される。そしてその多くは、殆んどすべては戀物語である。女の無い小説を書くのは危険な企圖である、百中の九十九は本は賣れない。

勿論此等の事は世界を通じて英國民が讀者として主としてこの題材に興味を有してゐるといふことを意味する。諸君が全民族が何よりもまさつて或一事に興味を有して居るのを見られたら諸君はそれは通常人の生活に於てその題材が非常に重要なものであるからだと信じてよろしい。それから又すべての外界の助力から獨立して男は自分の妻を女は夫を各自が選擇せねばならぬ、たゞ選擇するばかりでなく出来るなら手に入れねばならぬといふ社會を想像してみねばならぬ、競争はこの場合にも又他の萬づの事に於けると同じく支配してゐるのが西洋社會の大原則である。最善の男は——即ち最も強く最も賢き男は最も美しいといふ意味に於ての、最善の女を大抵は得るのである。

弱い懦弱な、貧乏な、醜いものは結婚する機會は全くない。數千の男女が結婚することが出来ぬ。それは上中流階級の話である。百姓勞働者などは若くして結婚する、が競争は矢張り同じである。かるが故に誰でも結婚するためには或種の奮闘が必要だと言はれ得る、又娶り甲斐のある女を所有するためには或種の戰鬥があると言はれ得る。かく見れば西洋では公衆が戀を取扱ふ文學の方に他のどんな種類の文學よりも興味を有

する理由があるといふことが容易に解る。

然し私が今述べた事情は歐洲各國ほゞ同様だけれども戀を取扱ふ文學の調子は全然同一ではない。非常な差違があるのである。散文に於ての方が詩に於てよりも眞面目である、それはいづれの國に於ても輿論によつて詩に於ての方が一層の自由を許されてゐるからである。各國に於けるその取扱方法の差違は實に性格の國民的差違を示すものである。北方民族の戀物語や戀の詩は非常に眞摯である、そしてこれらの作者は一定の埒内に制限せられてゐる。或る種の題は一般に禁止されてゐる、例せば英國の公衆は戀についての小説を欲するけれどもその戀は人妻たるべき少女の戀でなければならぬ。言ふまでもなくこの規則を破棄した作者は多數居る、が規則は依然として存する。善い女と悪いのと二人の婦人の葛藤を描いてよろしいがもし悪い女が勝利を占めることになつたら公衆は大いに反對する。この英國流はリチャードソンの時以來十八世紀より存在して居る又今後も長く續くだらう。

さてこれは佛蘭西で小説著作を支配する規則では決してない、佛蘭西小説は一般に結婚後の、婦人が世間及戀人達に對する關係を取扱つて居る、その結果佛蘭西小説には姦通や兩性の不當な關係や英國人だつたら許しさうにもないいろいろの事に關することが多量にある、これは英國人が佛蘭西人又は他の南方民族よりも道徳的に善いといふことを意味するのではない。がそれは社會狀態に大きな差違があることを意味する。一つの此様な差違は極く簡略に言ひ表はされ得る。英國、亞米利加、丁抹、諾威、瑞典の少女は結婚前にあらゆる自由を許されて居る。少女は御前達は自ら自分の世話をして、間違を仕出かしてはならぬと命せられる結婚後にはもはやこんな自由はない。

北方諸國では結婚後は婦人の行動は嚴格に監視される。然し佛蘭西や南方諸國では少女は結婚前には全く自由はない、彼女は常に兄弟か父か母か又は世馴れた親戚の監護の下にある。彼女は何處に行つても附添人がついて行く。彼女は約婚者にさへ監視人が居なくては會はされぬ。が結婚後に彼女の自由がはじまる、その時彼女は初めて自ら自分の世話をせねばならぬことを命せられる。戀や結婚を取扱ふ南國と北國とは事情が異なるのが諸君はお解りにならう。この理由だけでも佛蘭西と英國とでは小説の性質が同一ではあり得ない。とはいへこの差違には他の多くの理由——文學的情操といふ理由——があるのを記憶せねばならぬ。南方民族即ち拉丁民族は北方民族よりもずつと古い文明を有して居る。彼等は古代の即ちギリシャローマ世界の感情を受け繼いだ、そこで彼等は兩性の關係に就いてまだ古代詩人や小説家が考へたと殆んど同じ様に考へる。そして彼等は彼等の國語が英語よりもつと繊細な表現の力を有して居るために英國作家のなし得ぬことをなし得る。

ラテン作家(南方作家)は今でもキリスト教以前に考へられたと殆んど同じ様に戀愛を語るのである。が然し私がキリスト教といつたのは歴史的時代を指すのである。キリスト教以前には北方民族も戀について彼等の大詩人達が現代に於て考へると殆んど同じ様な風に考へた。古代のスカンヂャビア文學がこの事を示してゐる。ヴァイキングといふ昔の海賊はテニソンやメレディスと同じ感じ方をしてゐる。彼はたゞ結婚に終る戀即夫妻間の愛情だけを眞實なものだと考へた。現代の英人、瑞典人、丁抹人、諾威人、獨逸人はその異なる戀徒たる先祖アンセスターがしたと全く同じき深奥な眞摯な高尚な考方で戀を觀た。私は異つた民族は性的關係に就いて、歴史よりも古い感情の差異を有して居ると言ひ得ると思ふ。その差異は國民の血液や靈魂に存するもの

であつて宗教も文明も全く變ずることは出來ぬ。

以上は英佛小説の差異に就て特に述べた、そして小説は就中國民生活の反影であり、物語の形をした、眞理の戯曲的説話の一種である。翻つて最高の文學たる詩に於てこの差異は一層顯著である。現代の南方詩人ラテンボックはアウグツヌス時代の古ラテン詩人と全く同じく自由に戀について著作しつゝある、然るに北方詩人は少しの例外はあるが非常な制限を遵守して居る。どこに線を引いたらよからうか。ラテン人が正しいか？英人が正しいか？道徳的にして善なるものと不道徳にして惡なるものとの間に如何して鋭敏な別區をなすべきだらうか。

ある定義を試みねばならぬ。

戀とは何ぞや？

ラテン作家に用ひられた所によるとこの言葉は下は昆蟲や動物の性的關係から「神の愛」と稱せられる宗教的情緒の最高なるものに至るまでの意味の範圍を有してゐる。この定義は吾人が用ふるにはあまりに漠然であるのは言を俟たぬ。英語では一般に認められたところでは性的熱情と深き友情との二つを意味する、これも又吾人の目的には廣汎すぎる。愛ラフといふ語の前に「眞の」フューといふ形容詞を加へて或定義が一般の會話上ではなされる。英人が「眞の愛」ラフといふときには彼は普通に全く熱情パッションをもたぬ或物を意味する。彼は男と人妻との間に生ずる所の、彼等を夫婦たらしめる情熱と全然關係のない完全なる友情を意味するのである。然し英詩人が愛ラフといふときには一般に情熱を意味して友情を意味するのではない。定義をしばらくやめて、事件を哲學的に考へやう。

ある非常に馬鹿な人達が最近数年の間にすら兩性間の愛の分類を試みた。彼等は傳奇的戀愛及び云々などと云ふ。全く馬鹿げ切つた事だ。性的愛情の意味に於ては只一種の愛即ち異性間の自然的引力があるのみである、そしてその最高なるものと最低なるものとの唯一の差異は高尚な人では多くの道徳的、審美的、倫理的情操がその情熱に關係して居るといふ點である。かるが故にその情操の最高なるものに於ても、錯雜しては居るけれども一つの優勢な感情即所有の願望といふものがあると言つて好い。所有の後のものは愛と呼んでもいい。が然しそれは完全なる友情及同感と呼んだ方がいい。

それは全く別なものである。あらゆる國に於て詩人の題目となる愛は眞實は戀であつてそれから生ずる友情ではない。

情熱の語原の意味は「懊惱の状態」といふのであるのは諸君御存知でせう、戀といふことに關してはこの言葉は西洋人にとつては特別な意義を有して居る。それはその言葉が目的が達せられる前の苦闘と疑惑と愛慕の時期を指すからである。さて然らばこの情熱のどれだけが文學の正しき題材であるだらうか？

其の困難は情熱の激しき時に現はれる心理現象の異常な性質を記憶することによつてのぞかれるだらう。その期間には不思議な錯覺がある、數千年前の大哲學者達の注意を惹いた驚くべき錯覺である。御存じの如くプラトンは非常に有名な説でこれを説明せんと試みた。或る時に於て人間の諸感覺を變化させる様に見へる否寧ろ實際に變化せしむる所の錯覺を私は謂ふのである。彼の目にはある特定の人の顔が突然この世で最も美しいものになる。彼の耳には或る聲の語調アクセントがありありとあらゆる音楽の内でも最も甘美なものになる。道理はこの事とは無關係である、そして道理にはこの魔術を破る力はない。自然の神祕からごうしてか、この

不思議な魔術が突如として人間の感覺を照らす、それからはじめやつて來た時の如うに音もなく再び消れ去る。全く幽靈のやうなものであつて、到底幽靈的な理論でなくては説明されぬ。ヘルバルト、スベンサアでさへもそれに就いて一新説に彼の推理を致した。この點に關してはこれ以上絮説する必要はない、たゞ或る考へ方によつて情熱は現存せぬ生命に關係があると現今考へられて居るといふことを申しておけばいい、略言するとそれは生存の數千回以前の状態に存した關係の有機質の記憶である。この説の眞偽は姑らく措いて問はぬとも戀の神秘的瞬間即この錯覺の時期が本來高尚なる詩の題材である。といふのは單にそれが人間生活の最も美はしき最も驚嘆すべきことであるが故である。然らば何故？

かくの如き情熱の短かき時に於て人間の性質が表すことの出來る最も高尚な最も繊美な情緒であるからである。人生の如何なる他の時に於てよりも其時に於てこそ人々は無我無私に、少くとも或る一人に對しては無我無私になる。單に無私なばかりでなく自己犠牲がその時期に特別な願望である。戀に陥つて居る青年は彼が所有してゐる何物でも愛する人に與へてしまはうと望むのみならず、苦痛に耐へ、危険に恐れず彼女のためには生命を賭せようと思ひ、かるが故にテニソンはこの時期を叙していみじくも歌つて曰く

Love took up the harp of Life, and smote on all the chords with might,

Smote the chord of Self, that, trembling, pass'd in music out of sight.

無私は勿論原因の如何に拘らず崇高な感情である。がこれは強く熱した時の高尚な情緒の中の一つのものでこの外、憐憫や親切——子供に對して感ずるとおなじ親切や——可憐な助なき人を愛し又擁護せんとする願望などがある。この時に何よりも強く感ぜられる第三の感情は、義務の感である、社會的道德的責任が

全く新しい意義で解せられる。たしかにこの事實とこの事實の美しさとは駁論することのできぬものである。道徳的情操が最高のものでそれに次いで美の情操即藝術的感情が又智識的及第二義の道徳的經驗の最高なるものである、科學的には美と善との間、即ち、物質的に完全なると倫理的に完全なるとの間には關係がある。勿論これは絶對ではない。この世に絶對なるものは一つもないがその關係が存するには存するのである。或る種の最高なる美を了解することの出来るものは又他の或るものを了解しうる。戀愛期の理想は錯覺であり、千のうち九百九十九は女の美は想像されたものに過ぎぬそれではそのため何か差異が起り得るだらうか？私は決してさうは思はぬ。美を想像することはほんとうは美を主觀的に見ることであつて、疑を挿む餘地のないものである。諸君が美を見るのはたゞ心の中に止まつても諸君の心の中ではたしかに美である、心の中では倫理的影響が行はれねばならぬ。人が想像的ではあつても肉体的の美を崇拜する時期には彼は最高の美即精神の美のある秘めやかな閃影を認める。眞に戀する人にして彼が選んだ女が人間の中で最も美しいばかりでなく道徳的な意味に於ても最善なものと信せぬものが世界中どこにあらう！

かく興奮せらるゝことの道徳的倫理的感情は突如人間のあらゆる美はしい力を働かせる、努力、偉業、精神的肉体的の壓迫、思慮の迅速、行動の精密などに對する能力を働かしめる。しばらくは新しい力の感じがある。人間能力の最善の活動に強く訴へるものは何でも善にして大抵は尊敬に價する。勿論人の性格のうちにあらゆるものの最善なものを常に發見するのはこの短かい期間である。この時には悪い性質や、狹量な方面は出来るだけ眼界を逸せしめてある。

さて他の理由と相俟ちて前述の理由のために戀愛の錯覺の時期が詩人及小説家が描寫すべき時期であるので

ある。彼等はこの境を超えて、安全だらうか、適當だらうか？ それは向上か墮落かの如何にある。向上とは道德的理想主義の範圍に留ることであり、墮落とは全くの動物的現實主義の水平線に墮ちるといふ意味である。この現實主義では高尚な努力に價するものは何物もない。

藝術の目的とは如何？藝術の目的とはこの世に現存するものよりよき状態を吾人に想像せしめ、又これによつてかくの如き状態の到來の路を準備することでありまたかくあるべきものではなからうか。偉大な藝術は皆この事をなしたと思ふ、諸君はギリシアでは母親達は彼等の想像が絶へず美を見て影響せられもつと美しい子供を生むように彼等の室に現實の何物よりももつと美しい神や人の立像を置いて居たといふ古い物語を記憶して居ますか？アラビヤ人の間でもまた母親はこのやうなことをする、たゞ彼等は彫像の術すべを知らぬからして自然に向つて生きた像イメを求めぬ。眞黒な輝く眼は美しいものである、だから妻達は天幕の中に眼の光り輝き美しいので有名なガゼルといふ、一種の小さい鹿を養つておく、絶へずこの可愛らしい鹿を見てアラビヤ人の妻はいつかガゼルの眼のやうな美しい眼を持つた子供を生まうと望んで居る。藝術の最高の職能は吾人に對して、少くとも世間に對して、この立像やガゼルがギリシア人やアラビヤ人になすと期待せられて居る所のものをなさねばならぬ即ち現状よりもより高き状態を作ることである。

これだけ申したから再び人生に於ける戀の情熱の位置と意義を考へよう。それは本質的には理想主義の時期でありこの世に可能なるものよりもよりよき事と状態とを想像する時期である。戀をした人は誰れでも物事を可能なもの現在するものよりも高く考へたものである。理想主義ならばどれも藝術の適當な題材である寫實主義は全くこれに反する。もしすべてこれらの情熱や想像や繊細な感情を全く簡單な動物的衝動に基づ

くものと認めてもその情熱の結果の價値を減するものではない。人間の他の情緒についても全く同様の事が云へる、それらはみな進化的にその根原に遡れば人が下等動物と等しく所有する簡單な利己的衝動に發して居る。然し林檎の木や梨の木がその根が地中にあるからと言つてその果實が美しくなく滋養にならぬといふことはないではないか。決して私等は果實をその地中にある根によつて判斷してはならぬ。根を見やうとて地面を掘りかへすのが何になる？ 寫實主義者少くもフランス寫實主義者は地面を掘りかへすのが好きである。彼は讀者の注意を最も低級なものに惹きつける。その樹木が戀だとするなら樹木の根は地面下に蔽ひ隠しておかねばならぬといふ同じ理由で隠しておくべきものに注意を惹きつける。

錯覺の時期は情熱の最も美るはしい瞬間であつてそれは詩人、小説家が自由に自らの最善を竭くすべき藝術地帯である。彼がその地帯を超へて進むならたつた二つの方向しかない。この地帯上には宗教があり、藝術家は例せばダンテの如く愛を宗教的恍惚レリジエス エキスタシーに變ずるに成功することが出来る。現代は宗教的恍惚の時代ではないから今それをやる事が出来るとは思はれぬ。が上の方へはこれより外に道はない。下の方へは地獄に達するまで行ける。理想主義の地帯と寫實主義の殘忍との間には勿論多くの段階がある。私は單に私が絶對の眞理だと思ふ所の即戀を取扱ふには文藝家はこの錯覺の時期についてのみ描きそれ以下に下るは危険な企圖であるといふことを示しつゝあるばかりである。さてこの問題について大文學と然らざるものとの正當と信せらるべき區別を試みたからこれから二三の實例を研究しやう。私は英國詩人及其他から手當り次第に數節を選んで私の意味を説明しやう。

テニソンは近代詩人のうちで諸君に最も親しいものであらう。彼は情熱の理想感情の巧みな實例を與へて居

る。その一つは「モウツ」といふ一人劇モノドラマイにある美しい歌の末節である。戀人が庭園で耳を澄まして彼の愛人が近づく覺音を聽いて居る處である。

She is coming, my own, my sweet,

Where it ever so airy a tread,

My heart would hear her and beat,

Were it earth in an earthy bed;

My dust would hear and her beat,

Had I lain for a century dead;

Would start and tremble under her feet,

And blossom in purple and red.

これは全く理想的な情緒の最も美るはしい例で——形容の力は放肆と言つてもいい、が然し全く眞面目で且眞實なものである戀の想像はいつでも放肆なのだから。乙女の覺者が實際に亡き人を呼び覺ますかどうかを問ふのは無用の事であつてたゞ、戀がこんな事を想像せしむるのは全く自然な事なのである。これは世界到處實際である。モハメッド時代よりずっと以前に作られたアラビアの詩も全く同じ思想をもつと單純な言葉で歌つて居る、日本の歌にも似通つた思想が含まれて居ると私は思ふ。この歌の本當の意味は女の聲や顔付や觸感や覺音さへも彼女を戀する人にとつては生死の問題の如うな偉大な意義を有するやうになつたといふことである。其間しばらくは彼は戀人以外には神を知らぬ、彼女は彼に對して無限の抵抗し難き力を有す

るといふ意味で彼女こそは彼の神である。

次の例は同じ詩の中から借りやう、それは婚約が成つた後の有頂天な喜を歌つたものである。

O let the solid ground

not fail beneath my feet

Before my life has found

What some have found so sweet;

Then let come what come may,

What matter if I go mad,

I shall have had my day.

Let the sweet heavens endure,

not close and darten above me

Before I am quite, quite sure

That there is one to love me;

Then let come what come may

To a life that has been so sad,

I shall have had my day.

戀人の感ずる所は戀する女を獲た後には如何なる事が起つても介意する所ではない。女を獲るには生も死も苦痛も其他何物を拂ふも辭せないと言ふのである。醋覺の最も著るしい現象の一つは如何なる結果にも全然顧慮しない尠くとも道義的恥辱と名譽失墜を意味するものでさへなければどんな結果も顧慮しないことである。この美るはしい無頓着の問題は情緒の他の方面を考へてみると後に述ぶる如くテニソンよりもヴィクトル、ユーゴーによつて一層驚くべく巧に取扱はれて居る。その前に私は一アメリカ人によつてなされた戀のローマンズの非常に魅惑的な取扱方に諸君の注意を惹きたい。それは現代の述作のうちで最も優美なものである。もう既にそれは四五種の詩集に版行されたのだから多分クラシックになるだらう。題は「アタランタの競走」(Atalanta's Race)といふのである。

先づこの詩の美しい象徴主義がわかるやうにアタランタの話を物語らう。アタランタはギリシア王の娘で比びなく美しい乙女であつたばかりでなく世界で一番速い走者ランナーであつた。彼女は狩獵に日日を過して結婚しやうとは思はなかつた。が多くの人々が結婚を申込みるので彼女に競走で打ち勝つたものには望を許すとの法律が發せられた。もし萬一競走で彼女を打ち敗かしたら、其男と結婚しやうと約束したがもし男が敗けたら彼は殺されることになつた。男がまづ走らされてその乙女は手に槍を携へて彼の後を追つかけ追ひ付いたら槍で殺したのであると言ふものもある。がこれに付いては種々の説がある。多くの求婚者は競走に敗けて殺された最後にヒポメネスといふ青年は愛の女神から三つの黄金の林檎を授けられ、競走の時にこの林檎を落した。乙女はそれを拾はうとたちどまるだらう、そしたらかくして彼は競走に勝てるだらうと教へられた。そこで彼はアタランタと競走して危うく彼女に打敗かされやうとするのを見た時に一つの林檎を落した。アタ

ランタは拾はうとしてたぢとまつた。そこで青年は少し勝つた。かくの如くして競走に打ち勝ちアタランタと結婚したのである。ギリシア神話によるとこの二人は神々を怒らしたので獅子になされたといふことである。が然しそれは今此場合に關係のないことである。この古いギリシアの物語には最も美しい教訓がある。そしてこの作の價値は作者モーリス・トムソン (maurice Thompson) がこの教訓を認めこれを用ひて大なる哲理を説明しやうとしたことである。

When Spring grows old, and sleepy winds

Set from the South with odours sweet,

I see my love, in green, cool groves,

Speed down dusk aisles on shining feet.

She throws a kiss and bids me run,

In whisper sweet as roses' breath;

I know I cannot win the race,

and at the end, I know, is death.

But joyfully I bare my limbs,

Anoint me with the tropic breeze,

And feel through every sinew run

The vigour of Hippomenes.

O race of love ! we all have run

Thy happy course through groves of Spring,

And cared not, when at last we lost,

For life or death, or anything !

少し解説を要する思想がこれにはある。ギリシアのゲームや競技會は春に開催せられ競技者は裸體であるのは御存じでせう。また彼等は皮膚を日光や暑氣から保護しまた身体をもつと柔軟にするために身体に油を塗るのである。詩人はこの青年が人生の熱帶期とも言ふべき春の暖かな微風によつて油を塗られた如く歌つて居る。實に美るはしい想像である。この眞實の意味は「現今はもうギリシアのゲームはないが愛の競走は今日でも昔のやうに行はれて居る、青春こそ競走の時であり青年の雰圍氣こそ競技者のアンイスト灌油である」然しこの詩の教ふる點はこの偉大な魅力即ち美しい驚くべき事實の詩的叙述である。如何なる人の生涯にも唯だ一人の人を憧憬しその人のために多くの苦しみを重ねる時がある、それでも其時には如何に苦しむも、死するも介意せず、後年に青春の時代を回顧する時に其當時の感情を不思議に思ふのである。歐洲では今日もこのギリシアの物語は依然眞實である、殆んどありとあらゆる人はこのアタランタの競走に加はりその結果を甘受せねばならぬ。

戀の錯覺の愉快な局面の一つは舊知の感である。我が今愛する人は何時であつたか何處であつたかは忘れたが久しい前に知り合ひになり我が愛した人であるとの感じである。諸君の多くは視覺や聽覺が何か新しい非常に愉快な經驗で興奮されると珍らしいといふ感じは全くなくなつてしまふか或はほとんどなくなつてしまふのに氣付かれたことゝ私は思ふ。諸君は何か新しいものを見たり聞いたりして居るとは感じないで久しい以前からよく知つて居るものを見たり聞いたりして居るやうに感ずる。私は日本人の少年と四國の美しい田舎町に旅行したことがある、そして私等が本道に入るや否や彼は「私は前に來たことがある」と叫んだ。勿論彼は來たことはない、彼は大阪人でその時まで大阪を出たことはないのだつた。が然し新なる經驗の愉快さに彼は實は見たこともないのに非常に親しくなつて感じたのである。私はこの新しいものを親しく感ずる事を説明しやうなどは思はぬ——それはローマのシセロに大なる神秘であつたやうに依然大なる神秘である。然し戀した人は誰れでも多分しばらくは同じやうな感じを持つただらう——何時か何處かは神秘にして、わからぬけれども私は『あの女は知つて居る』といふ感じを懷いたに違ない。現代詩人のあるものはこの感じをいみじくも歌つて居る。最もいい例はロッセッタイの“Sudden Light”といふ精妙なる抒情詩である。

I have been here before,

But when or how I cannot tell:

I know the grass beyond the door,

The sweet keen smell,

The sighing sound, the lights around the shore.

You have been mine before,——

How long ago I may not know:

But just when at that swallow's soar

Your neck turn'd so,

Some veil did fall,—— I know it all of yore.

Has this been thus before ?

and shall not thus time's eddying flight

Still with our lives our loves restore

In death's despite,

And day and night yield one delight once more ?

ロセツテイはこの思想を又もつと複雑した詩で同じ様にうきうき歌つて居る。が然しも一人の詩人 Arthur O'Shaughnessy はロセツテイ以上にこの思想が絶えず心に浮んだ。ロセツテイのやうに彼もはげしく戀をした人であつてその戀は又非常に不幸なものであつた。彼は彼の胸懐にある苦しみと嘆きから今有名になつて居る詩を作つたのである。丁度籠の中に生れた鳥は眼を見えなくした時の方が上手に啼くと言はれて居るや

Along the garden ways just now

I heard the flowers speak;

The white rose to'd me of your brow,

The red rose of your cheek;

The lily of your bandel head,

The hindweed of your hair :

Jack looked its loveliest and said

You were more fair.

I went into the woods anon

And heard the wild birds sing

How sweet you were; they warbled on,

Piped, trill'd the self same thing.

Thrush, blackbird, linnet, without pause

The burden did repeat,

And still began again because

You were more sweet.

And then I went down to the sea,

and heard it murmuring too,

Port of an ancient mystery,

All made of me and you :

How many a thousand years ago

I loved, you were sweet——

Longer I could not stay, and so

I fled back to your feet.

この末節は私が今言つた思想を特に表して居る。「Greater memory」といふ詩にはこの思想はもつと充分に表はられて居る。「Greater memory」といふ言葉によつて諸君は現世以上の前世の記憶といふことを理解せねばならぬ。この詩は不朽なる十九世紀の詩の一部となつた。最もいい數節を引用しやう。

In the heart there lay buried for years

Love's story of passion and tears;

Of the heaven that two has begun

And the horror that tore them apart;

When one was love's slayer, but one
Made a grave for the love in his heart.

The long years pass'd weary and lone
And it lay there and changed there unknown;
Then one day from its innermost place,

In the shamed and ruin'd love's stead,
Love arose with s glorified face,

Like an angel that comes from the dead.

It uplified the stone that was set

On that tomb which the heart held yet;

But the sorrow had moulder'd within,

And there came from the long closed door

A dear image, that was not the sin

Or the grief that lay buried before.

× × × × ×

× × × × ×

There was never the stain of a tear

On the face that was ever so dear;

'Twas the same in each lovelier way;

'Twas old love's holier part,

And the dream of the earliest day

Brought back to the desolate heart.

It was knowledge of all that had been

In the thought, in the soul unseem;

'Twas the word which the lips could not say

To redeem or recover the past.

It was more than was taken away

Which the heart go back at the last.

The passion that lost its spell,

The rose that died where it fell,

The look that was look'd in vain,

The prayer that seemed lost evermore,

They were found in the heart again,

With all that the heart would restore.

神秘的な調子の少ない言葉に直すとこの物語はかうである。一人の青年と少女とが互に戀しあつた。が戀は暫らくしか續かないで彼等は何かの過失で別れた——女が不忠實であつたと想像してもいい、男の方では彼女の不信も忘れて絶えず香き去つた女を戀しつゝけて居た。二人は死し葬られた。數百年の間彼等は葬られたまゝであつた。彼等の肉體は塵にかへつて地の塵と混じた。然し肉體は死し消ね去るとも宇宙永遠の次序には純なる戀は決して消ね去るものではない。かくて幾代かの歲月を経てこの男が不信な女に對して有した純な戀が再び他の男の心に生みつけられた。同じ戀が。——でも全然同じではない——昔、誠を破つた女の靈も亦再び化身して人となつた。そしてこの二人は邂逅するや人々は戀と名づける、然しほんとうは偉大な記憶即過去の生涯の回想によつて互に引きよせられる。が今後は彼等に取つて全く幸福である。二人の心の弱い、悪い部分はほんとうに死んでしまつて數百年の昔に遺されてた。高尚な性質のみが生れかはつた。残つて居つてはならぬ悪い性質はすべてない。残るべき善い性質はすべて再び生れかはつた。これは實際、進化説であるが又詩人の奔放である。人間の不道德な方面は詩人の想像する如く爾く迅速に消ね去るものではないからである。吾々のもつと單純な欠點でも取り除くのは多分數萬年を要する問題であらう。兎に角空想は吾々を魅惑し誘惑してかくあれかしと實際に望ましめる。

現代の詩人はかくの如く戀の歴史を現世以前に擴張するが吾々は又全く同じ事を他の方向に期待してもい、私は天上での二人の結合又はそんな種々の事を言ふのではない、單に死後にまで繼續した愛情を言ふのである。然しそんなのは過去生涯の回想を取扱ふ詩ほどに興味あるものにはなり得ない。吾々が過去を想像的に考へるときには何等かの根據がある。過去はあつた、これには何の疑もない。現に吾々が生きて居るといふ事實は數千年又は數百万年前に生きて居たといふことを充分眞實らしく思はせる。之に反して吾々が詩的インスピレーション神來を求めて未來に對する時には全然譯が違ふ。其の場合吾々は經驗によつて立脚すべき根據がなくして想像せねばならぬ。勿論再び肉體を有つて生れたら多くの事を想像することが出来る。が生と死との間には誰れも知り得ぬ不可知の時間がある。この時には詩人は夢想的な經驗によるものである。"A Pause", といふ美しい詩でクリスチナ、ロセツタイが歌つたのはこのやうな經驗についてである。

They made the chamber sweet with flowers and leaves,

And the bed sweet with flowers on which I lay,

While my soul, love-bound, loitered on its way,

I did not hear the birds about the eaves,

Nor hear the reapers talk among the sheaves:

Only my soul kept watch from day to day,

My thirsty soul kept watch for one away: ———

Perhaps he loves, I thought, remembers, grieves.

At length there came the step upon the stair,

Upon the look the old familiar hand :

Then first my spirit seemed to scent the air

Of Paradise; then first the tardy sand

Of time ran golden; and I felt my hair

Put on a glory, and my soul expand

女の死んだ室には草花が飾られ亡骸には供物がしてある。ベッドの上にも亦、花が飾られてある。女の幽霊はこれらを見ながらそのためにうれしくも悲しくも思はぬ。彼女は彼女が死んだ時に遙か旅路にある愛人の事のみ思つて居る。彼女は彼がほんとうに愛したか又彼女の死を聞いてほんとうに嘆くかを知りたい。室の外には鳥が囀り向ふの畑では農夫がせつせと働き、働き乍ら話して居る。しかし幽霊はこれらの物音には耳を傾けぬ。たゞ愛人のためにこの室に留り愛人が来るまでは立ち去らうにも去られぬ。どうどう彼の足音が聞ける。彼女はよく彼の足音を知つて居る。戸口の錠前に手をかけた物音をよくおぼわて居る。彼女は彼をまだ全く見ぬ前に急に初めて愉快に感ずる。もう彼女には天上の花の香を嗅ぐことが出来るやうに思へる彼女の頭のまわりにに天使の頭のやうに榮譽の冠が自然と出来てきて、ほんとうの天が、愛の天が間近にあるやうに思はれる。

何といふ美しさであらう。たゞ一寸“the sands of time ran golden”といふ一行を説明しておかねば

ならぬ。

多分諸君はテニソンの“Locksley Hall”にあつたと同じ直喩をおぼれて居られるだらう。

Love took up the glass of Time, and turn'd it in his glowing hands;

Every moment, lightly shaken, ran itself in golden sands.

こゝで時間は砂漏時計の砂に喩へられ“to run”といふ動詞は普通砂漏時計の上部から下へ砂が流れ落ちるのをあらはすからこゝに用ひられて居る。即ち美しい砂が水の流るゝ如く流れ落つるのである。

“Sands of time ran golden”とか又は“sands of time become changed into gold”とは益々幸福に天上のそれのやうに幸福になるのを詩的に叙べたまでである。愛人の梵音の近づくのを待つて居る女の幽霊を歌つたこの短い詩で比較が如何に美しいものになるかも諸君は御わかりだらう。

この情緒の他のいろいろの方面は別々に考へよう、すぐれて美しい、その一つは記憶である。これにも勿論いろいろの方面がある。あるものは幸福ばかりに満ちた思出であり或は又堪へがたき悲痛の思出もある——散歩の思出、面會の折のことさては又「左様ならの」瞬間。こんな思出は戀を歌へる英詩の寶庫ではその大部分を占めて居る。めいめい違つた種類ではあるけれど三つだけ例をあげよう。第一の Coventry Patmore である。彼は“*The Angel in the House?*” “*The Unknown Eros?*” の二冊の珍らしい詩集を書いた。この第一の詩集で彼は自分の求愛と結婚——これは詩人にとつてはきはめて危険な事だが彼はこれに成功した——の歴史を書いた。第二冊はいろいろの詩を集めたものでこの中には非常に美しい詩もある。私は“*Amelia?*”といふ詩から數行引用しよう。これは戀人と共に過した夕方の話でこゝに引用する數行は彼女を家に送つて行く

時の詩である。

●●● To the dim street

I led her sacred feet;

And so the Daughter gave,

Soft, moth-like, sweet,

Showy as damask——rose and shy as musk,

Back to her Mother, anxious in the dusk.

And now "Good Night!"

なせ詩人はかく歌ふだらう？なせ少女の足を「聖き」とは言ふのだらう？彼女は丁度彼と婚約したばかりである、さればこそ彼には全く神聖に思はれる。然し彼は讀者に彼の美しい感情を傳へるに平易な言葉を使った。街は夜の幕につままれて薄暗い。夜には装を凝らした少女の姿は宛も美しい“moth”のやうである。“moth”とは英國の夜に出る蝶の名である。英國ではmothはほんどうの蝶々よりも一層綺麗で眞紅や紫や鶯色や又は黄金色の翼をして居る、そこでこの比喩は英國に限られたものではあるけれどもはめて美しいものである。それから又mothが音も無く飛翔する静かさを暗示して居る。さてshowy as damaskroseといふのが美しい直喩であるのはたゞ庭莢が英國の庭園では薔薇の内でも一番色の華やかな驚くほど綺麗な花だからである。Shy as muskとはむしろ思ひ切つた直喩である。麝香は日本婦人に用ひられると同様に英國婦人の用ふる香料である。これほど慎重に注意深く用ひられる香料は他にあるまい。少しでも多く用ひ過ぎる

と氣持の快いものではない。が然し丁度適當なだけ用ふとこれに優つた香料はない。それで『麝香のやうに恥しげな』とはたつた少しあつても嗅ぎつけ損ふことはない少女らしき恥らひ——美しくあるより外すべからぬ少女の恥らひをさすのである。兎に角この比喻は説明するよりも寧感すべきものである。第二のものはロバート・ブラウニングの作から引用しよう。こゝには詩人にさへも感ぜられぬことがある、たゞ戀人に特有な感じが取扱はれて居る。最も愉快で或は何か心を惹くものを見て居る時にこの樂しみを戀人と共に分ちたいとの願——。がこの願と事情とがほんとうに合致することは滅多にない。この願を歌つたブラウニングの短かい抒情詩は十九世紀の最も美しいものの一つである。

Never the time and the place

and the loved one all together!

This path-how soft to pace!

This May——what magic weather!

Where is the loved one's face,?

In a dream that loved one's face meets mine

But the house is narrow, the place is bleak,

Where, outside, rain and wind combine

With a furtive ear, if I try to speak,

With a hostile eye at my flushing cheek

With a malice that marks each word, each sign!

何でもこの世では思ふに任するものはない——。朗らかな天氣、綺麗な場所、それと愛する人も同時に居合せることが仲々ではない。それかゝきつと欠けて居る、場所がよければ天氣が悪かつたりする。もし天氣と場所とが申分がなければ愛人が居らぬ、さて詩人は結構な場所に來あはせてこの前戀人に會つたことを思ひかへして居る。それは小さい薄暗い寒い家であつた。窓の外には雨と暴風が吹いて居る。風の音や雨の音は丁度竊聽して居る人々の物音が或は窓からそつと覗き込まうとして居る人々の物音のやうであつた。勿論この會合は秘密であつて又願つた程愉快なものでなかつた事が必要である。

第三の例は非常に美しい詩である。これは婚約の日の思出で作者はフレデリック、テニンソンである。テニンソンは三人あつてアルフレッド、テニンソンがその内で第一の詩人ではあるけれどみんな立派な詩人であつた事は申す途もない。

It is a golden morning of the spring,

My cheek is pale, and hers is warm with bloom,

And we are left in that old cavern room

And she begins to sing,

The open casement quivers in the breeze,

And one large musk-rose leans its dewy grace

Into the chamber like a happy face,

And round it swim the bees.

x x x x x

I know not what I said,——what she replied

Lives, like eternal sunshine, in my heart;

And then I murmured, Oh! we never part,

My love, my life, my bride!

And silence o'er us, after that great bliss,

Fell like a welcome shadow; and I heard

The far woods sighing, and a summer bird

Singing amid the trees.

The sweet bird's happy song that streamed around,

The murmur of the woods, the azure skies,

Were graven on my heart, through ears and eyes

Marked neither sight nor sound.

She sleeps in peace beneath the chancel stone,

But ah! so clearly is the vision seen,

The dead seem raised, or Death has never been,

Were I not here alone.

これは心の記憶をさながら晝のやうに描き出す偉大な技巧である。この中の『美』を二三述べやう。男が色青ざめて居るのは恐れかつ心配して居るからである。彼は女に質問をしたが何と女が答へるかは知らぬ。これはすべて遠い遠い昔のことではあるが其の朝の強い情緒は事々物々あらゆるものを記憶の上に彩色奇しくも生々と今に残つて居る。幾歳月を過し乍らなほも彼は室の光景や、さしこむ日の光や真紅の薔薇が園から室を覗き込んで居たのやさては又飛び交はず蜜蜂の姿を思ひかへすのである。問が發せられ嬉しい答を聞いた後には喜びのあまり二人とも言葉も出なかつた。そして二人が黙り込んだために戸外の物音が殆んど堪へられぬほどにはつきりと聞え出した。遙か遠くで梢を鳴らす風の音や鳥の音を思ひ浮べる——彼は晝の色合や光を思ひ浮べる。がそれはもう遠い遠い昔になつた。彼女も亦既に亡い。遮莫記憶は丁度、時の歩みがとまつたかのやうにそれとも彼女が奥津城から再び歸つてきたかのやうに彼の心には明らかに生々としてゐる。悲しいかなたつた一つの事實がそれは思つても詮ない記憶にすぎぬといふことを教へてくれる。——それは彼が今はたつた一人の孤獨の身だといふことである。

さて又戀の錯覺の問題にかへつて錯覺は常に、といふよりは、決して消え去るものではないといふを申して

おかう。これは幸福な結合の場合には、即ち自然の大なる目的のためにもう必要でなくなつた時にはいつでもなくなつてしまふ。然し望んだ少女が獲られなかつた失戀の場合には理想的な映像はいつかな消え去らず一生涯執念く心を襲つて最も順境な生活をも不幸なものとなすことが出来るものである。時とするとこんな失戀の結果、世間や人生や宗教に關する考を全然變化せしめることもある。何でもかでも彼には闇黒なものばかりである。失戀した多くの青年がその瞬間から宗教的感情を失ひはじめ。それといふのも彼が運悪く不幸だつたといふそれだけの理由で宇宙は誤つて居ると彼に思はれるからである。之に反して戀に成功した人は宇宙は正しいと考へ神に感謝を捧げ彼の宗教と人性に對する信念を強める。私はこの事に付ての目星しい英詩は一寸思出せない。が佛蘭西では成功した戀と宗教的感情との關係を單純な言葉であらして居るウイクトル、ユーゴーの短かい詩がある。こゝに述べるのはその英譯である。題材は婚約の女が夫の腕に凭りながら夜、散歩して居るのである。其の夕の思出は次の如く歌はれて居る。

The trembling arm I pressed

Fondly ; our thoughts confessed

Love's conquest tender ;

God filled the vast sweet night,

Love filled our hearts ; the light

Of stars made splendour.

Even as we walked and dreamed,
"Twixt heaven and earth, it seemed

Our souls were speaking ;

The stars looked on thy face ;

Thine eyes through violet space

The stars were seeking

And from the astral light

Feeling the soft sweet night

Thill to thy soul,

Thou saidst ; "O God of Bliss

Lord of the Blue Abyss,

Thou madest the whole !"

And the stars whispered low

To the God of Space, "We know,

God of Eternity,

Dear Lord, all Love is Thine,

Even by Love's Light we shine!

Thou madest Beauty!"

勿論こんな場合宗教的感情はそれ自身、錯覺の一部ではあるが、單純な感情に非常な深さと美しさとを與へる。且つこの詩は一つの眞理即ち吾々が完全に幸福である時には宇宙がすべて神聖で又神の如く美しい事、言ひ換へると吾々は天國に在るといふ眞理を強く説明する。之に反して吾々が非常に不幸な時には宇宙は希望も喜も祈りを捧ぐべき神もない一種の地獄のやうに見わる。

然し私がヴィクトル、ユーゴーの抒情詩に注意を願つた特別の理由はこれが哲學的批評家によつて宇宙情緒コスミックエモーションと稱せらるゝ特別な性質を含んでゐるかりである。宇宙情緒とは人間情緒の最高のものを意味する。コス

モスといふ語はユニバースを意味し地球ばかりでなく恒星惑星數百萬のありとあらゆる限りを意味する。故にコスミックとは全宇宙に關係する意味である。一般の情緒はその關係が個人的にとゞまらぬ。即ち諸君の情操は單に諸君自らに關係あるものに限らず多くの他人に關係する事柄を考へ知覺することによつて動かされるものである。こんな一般情緒の最大なものは全國民又は全民族に關係する感情即ち國民的感情と稱せらるべきものである。が然しこれよりも高い情緒がある。諸君が自らを自らの國民との關係に於て考ふるのみならず全人類との關係に於て考ふる時には諸君は第二又は第三の宇宙情緒を持つのである。第二又は第三と私がいふ所以はその情緒が第二又は第三であるか否かは一つに人類を一つと考へるや否やに懸つて存するからである。然しもし諸君が自らを當にこの世界との關係に於てのみならず數千萬の恒星惑星を含む全宇宙と

の關係に於て——即生存の全神秘に關係して——考ふるならば其時こそは諸君は最高級の宇宙情緒を有つのである。勿論これにも種々の程度がある、哲學者や形而上學者は詩人、藝術家の企及すべからざる美しい宇宙情緒を有するだらう。戀する人々は屢々各自の智的教養の程度に應じて一種の宇宙情緒を経験する。ユーゴーのこの短かい歌はこれを例証するものである。夜も星も空の深淵もすべて戀する人々の眼には愛と美とに震へて居るやうに思へる、それも彼自身が戀する人の幸福に浸つて居るからである。それから彼は自らと宇宙の生命との關係に、或は形式、名號を超越した最高の神秘との關係に思を致す。

かくの如き情緒の第三又は第四級のはキーツの逝去前少し前に書かれた美しい十四行韻詩で例証されて居る。非常に若い人のみがこの詩を作りうる。非常に若い人でなければこんな戀はできないから。何といふ喜ばしきであらう。

この十四行韻詩には題はない。

Bright star! would I were steadfast as thou art——

not in lone splendour hung aloft the night

And watching, with eternal lids apart,

Like nature's patient, sleepless Eremite,

The moving waters at their priestlike task

Of pure ablotion round earth's human shores,

Or gazing on new soft-fallen mask

Of snow upon the mountains and the moors

No—yet still steadfast, still unchangeable,

Pillow'd upon my fair love's ripening breast,

To feel forever iis soft fall and swell,

Awake forever in a sweet unrest,

Still, still to hear her tender taken breath,

And so live ever—or else swoon to death.

テニソンは戀人の頸飾が帯か又は耳環にならうと願ふ男を美しく歌つた。がそれは全く宇宙情緒ではない。勿論テニソンの歌の思想は昔のフランス及英國の農夫等の戀唄から取られたものである。がキーツの十四行韻詩、これでは戀する人が永遠にその愛人と共に在らんがために星の不滅性と相とを賦與せられんことを願ふのを歌へるこの小歌には昔のギリシヤ思想が加味せられて居る。このギリシヤ思想は二三千年の昔に次の美しい歌を生んだのである。(J. A. Simonds の譯より)。

Gazing on stars, My Star! Would tha I were the welkin,

Starry with myriad eyes, ever to gaze upon thee!

然しキーツの十四行韻詩にはなほ多くの希臘思想の美があらはれて居る。といふのはキーツはもつと大きな關係に立つて外部の宇宙を歌ひ星が永遠にたゆみなく海潮の干満に瞳を凝らし、海潮は又あだかも聖僧が殿堂を淨むる如く絶えずこの世を洗ひ淨めつゝある如く考へて居るからである。

あどけなき若者の想像は擴つて哲學者の想像の境地に及ぶのである。これ實に詩と哲學と、眞摯なる情緒の交錯し織り成せる想像である。

以上の例によつて英詩の戀愛を歌へるものは日本のそれと同じく、感情の直截なる吐露から、宇宙情緒をあらはす最高のものに至るまで題材の範圍に應じて數多の種類に分類されるのを諸君は會得せられたであらう。題目は非常に豊である。たゞ研究者はいづれを選擇むかに當惑するばかりである。私は繰り返しこの錯覺の問題、特に以上の例に表はされた如き錯覺の價値に注意せられんことを御勧めする。勿論諸君にとつては多分非常に奇妙に或はきはめて莫迦らしく思はれる詩が西詩には多數あるだらう。

が然し又奇妙でも莫迦らしくもないそしてそれは當に己れ自身に於てのみならずあらゆる文學の情緒發表の最高なる形式といふ點に於て研究の價値あるものが少なからずあるのは認められるだらう。最高の種類に屬する戀愛詩からは採つて以て諸君自身の感情の文學を豊豊にするばかりでなく新らしい色彩を加へ得るだらう。(一九一八、二十一、稿)